

《討論》 福田アジオを乗り越える — 私たちは『20世紀民俗学』から飛躍できるのか? —

日時：2010年7月31日（土）13：30～

会場：東京大学東洋文化研究所大会議室

登壇者：福田アジオ（神奈川大学外国語学部・教授）

コーディネーター・司会：菅豊（東京大学東洋文化研究所）、塚原伸治（筑波大学（院））

主催/共催：現代民俗学会、女性民俗学研究会、東京大学東洋文化研究所班研究「東アジアにおける「民俗学」の方法的課題」研究会

課題1：民俗学の定義の問題

福田定義に何が込められているのか？

福田氏の民俗学の定義は、20世紀民俗学の一つの定義として、大きな代表性をもち、強い影響力をもっている。しかし、それは20世紀民俗学の主流派であった「歴史民俗学派」を体現する定義であり、偏った定義ではないのか。また、その定義は、現代のアカデミズムの趨勢を眺めると、他の学問と比べ学問の対象、方法の面で制約的で、民俗学が学問としてある上で限界をもたらず主要要因になっているのではないか。

そして、これから民俗学が現代社会、現代アカデミズムに対応する上での足枷になっているのではないか。福田氏の定義は20世紀民俗学の発展のなかで更改されてきたものである。その更改の過程に、いかなる意図が込められていたのか。また、その定義が更改という作業の上に生み出されてきた以上、その定義自体も更改されうるものとして捉えることが論理上は可能であり、そのような今後の定義—民俗学の目的、対象、方法を含み込む—更改の動きに関して、どのような意見を福田氏はもっているのだろうか。

表1：辞書的定義の異同と変遷

定義の出典	定義	学問の対象	学問の方法
民俗学辞典 (1951) 柳田国男	民間伝承を通して生活変遷の跡を 尋ね、民族文化を明らかにせんとす る学問	民間伝承 民族文化	跡を尋ね、明らかに にする
日本民俗事 典(1972) 和歌森太郎	民間伝承を素材として、民俗社会・ 民俗文化の歴史的由来を明らかに することにより、民族の基層文化の 性質と本質を究明する学問	民間伝承 民俗社会 民俗文化 民族の基層文化	由来を明らかに し、性質と本質を 究明する
日本民俗大 辞典・下 (2000) 福田アジオ	世代をこえて伝えられる人びとの 集合的事象によって生活文化の歴 史的展開を明らかにし、それを通し て現代の生活文化を説明する学問	世代をこえて伝 えられる人びと の集合的事象 現代の生活文化	展開を明らかに し、説明する

質問：定義の変化の経緯について

- 1、なぜ福田定義は、既存の定義を変化させたのか？その経緯は？
- 2、学問の対象と方法の変化の意図は何か？
- 3、なぜ民間伝承という言葉削除したのか？
- 4、なぜ民族文化という言葉削除したのか？
- 5、なぜ現代という言葉を採用したのか？
- 6、なぜ生活文化という言葉を採用したのか？
- 7、なぜ集合的事象という言葉を採用したのか？
- 8、由来→展開への転換はどのような意味をもつのか？
- 9、究明→説明への転換はどのような意味をもつのか？

質問：定義の現代的意義について

- 10、民俗学は、その取り扱ってきた対象（民俗）が、社会で極端に周縁的であるにもかかわらず、なぜこの学問領域で生起する議論の中核をなすのだろうか？
- 11、歴史民俗学的定義は、民俗学の対象、方法の面で、現在、制約的であり限界性を有しているのではないか？
- 12、極端に歴史民俗学に偏った20世紀民俗学の性格が、これから民俗学が現代社会、現代アカデミズムに対応する上での桎梏になっているのに、なぜ変えられないのか？
- 13、福田定義は、多様な民俗学のあり方を排除するものなのか？
- 14、多様な定義の登場、あるいは展開を、アカデミック民俗学者を牽引した歴史民俗学派が阻んだのではないか？
- 15、現代的対象の対称化と方法の脱領域化を、福田定義は排除するのか？
- 16、福田氏は、定義の更改に反対するのか？反対するとしたら、その理由は？
- 17、日本民俗学者が、実際にやっている仕事と、彼ら彼女らが興味をそそる文化の領域とを説明するのに、民俗学という言葉がいまだ有効かつ適切な方法だろうか？
- 18、民俗学の対象や方法、名前を変えることで、民俗学者たちによって認識されている専門分野のアイデンティティ・クライシスを解決できるのだろうか？
- 19、もし、対象と方法の転換がなされたとして、その後、他の学問との差異が極端になくなった場合、アカデミーのなかで一定の位置を占める、すなわち学問的アイデンティティを保つことが困難ではないか？学問としての独自性はどこに？

課題2：民俗学の方法の問題

20世紀民俗学の主流であった歴史民俗学は、21世紀にいかなる可能性を持ちうるのだろうか。福田氏は、20世紀民俗学の21世紀化の項目の一つに「歴史認識の新たな方法」を挙げている。それは、「累積としての歴史」「形成過程としての歴史」を探る試みであり、

「過去を知って今を理解し、未来を展望する方法」とされるが、その具体像、歴史学との異同、その現代的有用性とはいかなるものか。

また、福田氏は、「民俗学の理論形成」を求め、メソドロジーとしての方法論、セオリーとしての方法論、そして、両者の整合的関係の構築を目指すことを要求している。しかし、そのような民俗学独自の理論形成が、20世紀民俗学の継承によって可能となるのであろうか。

これまで、日本民俗学は、「日本」の「民俗学」にしか通用しないジャーゴンとコンセプトを使用し、風変わりな学問となってきた。セオリーが脱領域的に共有される昨今、むしろ、そのような独自性の追求よりも、他学問で生起している汎用的なセオリー、概念、用語、対象の共有に、民俗学も務めなければならないのではないか。

質問：民俗学の理論化について

- 1、日本民俗学において、グランド・セオリー構築が可能か？
- 2、民俗学に求められている現在の理論とはいかなるものか？
- 3、福田氏が提唱する「歴史認識の新たな方法」とは何か？その具体像は？その現代的有用性とは？過去拘束性？
- 4、その歴史学との異同は、どういった点にあるのか？
- 5、歴史社会学の登場による、日本近現代史のアイデンティの危機を見るまでもなく、学問のボーダレス化、理論や概念の脱領域化が進んでいる。歴史民俗学的手法は、民俗学の「部分」でしかなく、学際的な観点から、多様な研究の視角、方法、手法を積極的に導入すべきではないのか？
- 6、「他分野の用語や方法論、流行に左右されるのではなく、民俗学の学史をふまえ、その問題意識を整理し、民俗学の本質、独創性を再確認することを目的とする…」という後ろ向きの問題設定が、いつまでも蔓延るのはなぜか？

・第850回日本民俗学会談話会(第62回年会プレシンポジウム)「民俗学は『変化』をどうとらえるのか」(2010.7.11 於：東北大学)

公募質問：門脇鮎子氏(武蔵野美術大学学生)

◎柳田の変遷の三段階について。

3/28(日)に行われた、女性民俗研究会第600回例会「20世紀民俗学のこれから」で話されたことについて。当日のレジュメスライドの5にて。→変遷の三段階。

- ・矛盾のない段階(過去)
- ・変化によって矛盾発生・蓄積(現在)
- ・民俗学の成果を基礎にした実践によって矛盾が解消した理想的な状態(未来)

過去には矛盾がなかったかのような設定となっていますが、はたしてそうなのでしょう
か？過去に矛盾のない世界などあったのでしょうか？新しい矛盾ができたから古い矛盾が

見え無くなっただけなのではないでしょうか？現在の矛盾がなかっただけで、過去には過去の矛盾があったかと思われまます。

課題3：伝承母体論の問題

福田氏が提示し、その後の民俗学の研究に多大な影響を与えた伝承母体論および個別分析法は、それ以前に（ほとんど唯一の方法とされていた）重出立証法を批判し、より確かな科学的方法として提示されたものである。それは機能主義の文脈で理解されることも多く、機能主義と同様の問題を抱えていると批判されている。福田氏の伝承母体論の発想への他の分野の影響はいかなるものか。

また、現代社会を考えた場合、必ずしも伝承母体によって担われるとは限らない事象も考慮に入れる必要があるのではないか。それらを民俗学として扱うべきではないと考えているのか。さらに、近年福田氏は、今日の民俗学において「民俗を個人から把握する」必要があることを述べているが、それは集団性を前提に置く伝承母体論とは容易に接続しないもののようにみえる。その具体的な方法についてどのように考えているのだろうか。

質問：伝承母体論の理論的問題

- 1、伝承母体と他分野との関係は？機能主義・共同体論 etc…との関係は？伝承母体論は機能主義か？
- 2、類型論と地域主義との関係は？
- 3、伝承母体はモデルであるのか、それとも実態理解のための方法か？
- 4、伝承母体にとって、「土地」「歴史」「集団」「規制力」の全てが必須か？
- 5、それを全て満たさないものによって担われる場合、民俗学の対象とならないのか？
- 6、伝承母体と個人の理論的關係は？個人をどのように考え、どのように扱うのか？
- 7、伝承母体によって担われるものに対象を限定した場合、民俗学の対象は限定され、扱えないものが増えるのではないか。それは民俗学の可能性を狭めることにはならないだろうか？

質問：伝承母体と現代社会

- 8、近年、メディアやインターネットを通じたコミュニケーションなどを含んだ、「伝承母体」をもたない現代的な問題を対象とするべきという意見がある。それは福田氏にとってもはや民俗学ではないのか？
- 9、逆に、伝承母体論の現代的有用性があるのでは？文化の所有や、文化表象の権利の問題に應用できるのではないか？

課題4：民俗学の国際性の問題

20世紀民俗学は、アカデミズム化の進展のなかで国際性を失い、あるいはアジアへ偏るという問題点を有している。20世紀民俗学は、なぜかくも内向的になったのか。また、現在、世界規模で「民俗学（に相当する学問領域）」の交流が開始しているが、そのなかで日本の20世紀民俗学は孤立感を深めている。一方、福田氏は、ここ20年来、中国で調査研究を行うなど、中国との国際的な交流経験が豊富である。

さらに、福田氏は、20世紀民俗学の20世紀化において、一国民俗学を超えて、歴史形成の単位を民族・国家に固定しない民俗学の構想の必要性を述べられている。それは民俗学の国際性の問題と深く関わるが、今後、日本の民俗学が、世界の民俗学とどのように関わるべきであろうか。さらに「地域へ深く、世界へ広く」という新しい民俗学の具体像とはいかなるものか。

質問：民俗学の国際性について

- 1、通常、アカデミズム化は、国際的な学知共有という方向に向かわせるはずであるが、なぜ、20世紀民俗学は、アカデミズムのなかで国際性を持ち得なかったのか？
- 2、20世紀民俗学が、80年代以降にアジア偏重（内向）になる要因は、比較民俗学というプリミティブでナイーブな海外展開が目論まれたからではないのか？
- 3、世紀民俗学の21世紀化において、一国民俗学を超えて、歴史形成の単位を民族・国家に固定しない民俗学とはどのような具体的な方法なのか？比較民俗学との異同は？
- 4、「地域へ深く、世界へ広く」という新しい民俗学の具体像？
- 5、福田氏にとって中国研究は、どのような意図をもって取り組まれ、どのような意味を持ってきたのか？

公募質問：武井基晃氏（筑波大学人文社会科学研究所・助教）

福田アジオ氏が長年にわたって中国調査へ赴き報告書を出していること、そして報告書以外の場ではほとんど中国やアジアについて言及していないことはよく知られている。2006年に刊行された報告書の前書きには「比較民俗学を標榜する人たちは、日本との近似性・近縁性に関心を示し、表面上の類似性や共通性に惹きつけられて、文化の系統を解釈したり説明したりすることがあります。私たちは安易な比較をしないことを前提に、各地の民俗をしっかりと把握し、地域に即して考察することを基本的立場としてきました」など興味深い意見が見受けられる。そこでこの機会に、日本民俗学の知見をもってアジアに出るといったことはどういうことなのか？福田氏自身はアジアで何ができたのか？また、何ができないことがわかったのか？将来的に何ができそうなのか？といった諸点についてお聞きし、今後の課題を明らかにしたい。

課題5：民俗学の調査論の問題

20世紀民俗学は、そのアカデミズム化の進行にともない、フィールド調査という手法に大きな変化を生じさせた。同じ期間に同一の地域を集団で分担調査する共同調査の手法が確立されたが、その手法の成立にいかなる背景、動きがあったのか？

また、その手法は、調査の効率性と専門性を高めるものであったが、一方で、専門分野のセクショナリズムや、調査項目主義、という弊害ももたらしたものと思われる。福田氏は、『民俗調査ハンドブック』などの書籍による調査手法の体系化を通じて、その確立に少なからず関与したが、その手法は現在、そして今後も有効だろうか。

また、20世紀民俗学の後半には、公共部門がスポンサーとなった自治体史編纂事業が発見し、多くの民俗学者が動員され、社会における民俗学の認知向上に一定の成果を上げたが、公的資金を基に生産された莫大な「民俗誌（民俗調査報告書）」は、現代的に意義があるといえるのだろうか。福田氏は、この自治体史編纂事業にも積極的に関わってきたが、この事業に、いかなる功罪を読み取るのであろうか。

質問：調査のあり方と意義について

1、20世紀民俗学の初期の調査方法は、各地から事象収集する「探訪型＝昆虫採集型」であり、民俗を標本化し、類型的に比較する方法であった。それを乗り越えるために、一地域の分担型共同調査や地域民俗学的調査法が開発されたが、その生成過程には、いかなる背景があったのか？それらの、有効性と限界性は？

2、学問の手法の汎用化という点で、20世紀民俗学の発展に寄与した『民俗調査ハンドブック』は、一方で、調査を（意図せず？）マニュアル化、画一化、範疇化してしまった点で批判されるが、その評価に関し福田氏はどのように捉えるか？

3、20世紀民俗学の多くのフィールド・ワークは、人類学に比べフィールドに対する深度、継続度、総合度に劣っているが、21世紀民俗学では、どのようなフィールド・ワークを目指すべきか？

4、現代社会の文化状況を考えた場合、民俗を限定的な文化と措定しても、地域民俗学的調査のみでは捉えきれない問題が表出しているのでは？

公募質問：施愛東氏（中国社会科学院文学研究所副研究員・東京大学東洋文化研究所外国人研究員）

現在の中国では、民俗学自身の発展という問題のほか、大学や研究機関において、どうすれば自身の重要性を高められるかという、言わば生き残りの問題と直面しています。こうしたなか、調査報告書だけを作ってきた民俗学は、「資料学」であり、「学術研究」ではないと思われる恐れがあります。それゆえ、近年では、民俗学に対して、外部の人が持つ「資料学」という印象を修正すべく、「フィールド研究」という概念を提唱する研究者がい

ます。

福田先生は中国の浙江省などで、長年調査活動を重ねてこられたと聞いております。先生が、これらの調査で得た資料を、どのようにお扱いになるかについて、お教えいただけませんか。先生はかつて、「いかなる場合でも、調査は分析を含むものであり、その分析を経る中で自己の仮説が検証され、その調査結果としての民俗資料は研究を構成するものとして登場せねばならない」と、ご指摘なさいました。先生はこれらの調査結果を、どのように分析なさるのですか。お教えいただければ幸いです。

質問：自治体史編纂事業の功罪

- 5、福田氏は、文化財保護行政など公的部門の民俗学的活動へ関与に、それほど積極的であったとは思われない。その福田氏が公的部門がスポンサーとなった自治体史編纂事業に積極的に関与した理由や目的とは何だったのか？
- 6、自治体史編纂事業には、地域民俗学や項目分担型・集中共同調査法の発展と呼応していたが、この事業が民俗学に与えた学問的成果は何か？教育効果？社会的認知？…
- 7、また、20世紀民俗学が推進した自治体史編纂事業が、一般社会に与えた、また将来与えるであろうポジティブな成果や貢献とは何か？歴史的貢献？
- 8、一方で、20世紀民俗学が推進した自治体史編纂事業は、学問的にも社会的にもネガティブな側面をもっているとも思われる。学問的には、分担意識による専門分化と調査法の定型化が進展し、自発的なフィールド選択、研究対象選択の意志と時間を奪い、民俗学の知的発展の障害になったのではないか？
- 9、さらに、調査員/専門委員＝学生/教員という構造的搾取機構を作り、ときには剽窃・盗作という倫理的問題を引き起こしたのではないか？
- 10、さらに、現在、蓄積された「民俗報告書」は、費用に見合っただけの社会的意義をもっているのか？公金の無駄遣いになってしまったのではないか？
- 11、誰のための自治体史編纂？研究者？

課題6：民俗学の実践の問題

20世紀民俗学は、その学問の初発に「学問救世」という目標を掲げ、「経世済民」を標榜し（たと言われ）、宮本常一のような実践派の民俗学者を輩出した。また、多くの民俗学研究者が、学校や博物館などの文化の公共部門において社会と密接に関わる活動を展開してきた。しかし、1950年代末からの民俗学へのアカデミズムの浸透に伴い、そのような実践的目標と活動が軽視されてしまった。

そのようななか、福田氏は、20世紀民俗学の21世紀化するために、民俗学における実践の必要性を説いている。それは、野の学問の精神を取り戻し、危機意識をもって実践的課題に取り組み、批判精神で問題設定して、発言する民俗学である。このような民俗学の

実践という方向性は、新しい公共民俗学とも通底するが、それでは日本民俗学における「実践」の具体像とはいかなるものであろうか？また、実践を規定する立場性を、我々はいかに乗り越えるべきであろうか？

質問：民俗学の実践について

- 1、20 世紀民俗学を 21 世紀化するにあたっての「実践」とはいかなるものか？
- 2、野の学問の精神を取り戻し、危機意識をもって実践的課題に取り組み、批判精神で問題設定して、発言する民俗学とはいかなるものか？
- 3、純粋学者か？御用学者か？政治家か？地域の実践家（practitioner）か？
- 4、他の学問に比べて特異的な研究者の属性、多様さはアカデミック民俗学にとってはネガティブであるが、むしろそれが社会との連結という面からいえばポジティブなのではないか？
- 5、それこそが、民俗学が 21 世紀において可能性をもつ「一つ」の方向性ではないのか？
- 6、その多様な立場性とミッションによる違いを認識、理解しつつ、相互にその違いを乗り越える必要があるのではないか？
- 7、20 世紀民俗学の後半のアカデミズム化は、アカデミック民俗学に学問の主導権を集中、独占させた過程といっても過言ではないが、現在、多様な立場が共に参画し、共に発言し、共に実践する学問＝現代民俗学と、それを支える場（学会）を再構築すべきではないか？
- 8、そして、その実践性を高める民俗学は、もはや 20 世紀民俗学の微修正では達成できないのではないか？

公募質問：佐々木美智子氏（女性民俗学研究会）

民俗学がこれまで学的な有効性を保持してきたのは、歴史認識という姿勢に負うところが多かったことは周知のことです。これからの民俗学が、歴史認識を重視するのか、見直す対象となるのかは、大きな問題点となるでしょう。以下の三点は、歴史認識を基本姿勢としつつ現在を凝視したいと考える自身の課題としていることです。

- ①歴史認識と個の問題
- ②アカデミック民俗学と実践性
- ③研究者の立場性の問題

これらが私の課題であると同時に、いわゆる 20 世紀民俗学に欠落していたものではなかったかと考えています。裏返せば個の軽視、実践性の欠落、研究者自身の当該社会への主体的関わり方の無自覚ということです。つまり、歴史認識としての民俗学を構築する過程において、民俗の歴史を求めるあまり、人間の物語を見失ってきたと思われるのですが、いかがでしょうか。

公募質問：坂井美香氏（新潟市立高志高校講師）

この会を企画された現代民俗学会の方々に質問があります。なぜ福田アジオが『20世紀民俗学』の代名詞なのかということです。また、なぜ、福田アジオを乗り越える必要があるのかということです。

現代民俗学と20世紀民俗学と線を引く以上、これまでの民俗学の方法論や学究範囲を打破することをお考えなのだと思います。日本の民俗学者が海外での民俗調査を行っていることを考え合わせれば、大卒で、日本の民俗学の閉塞感やどん詰まり感があるのではないかと思います。実際、日本国内で新しい風を感じる斬新な視点や方法論を持ったものは見あたりません。日本国内の文化の均質化や、サラリーマン化といった社会状況も確かにあります。

しかし、前記のような状況を作り出したのは、柳田を離れることのできなかった民俗学者の方々にあり、フィールド・ワークと言いつつ机上で民俗学を展開してきた研究者であり、それらを大学という場で受け渡しをしてきたことではないのでしょうか。それらの問題を置き去りにして、福田アジオの『20世紀民俗学』を乗り越えることを目的とする現代民俗学とは何かを問いたいと思います。

公募質問：門脇鮎子氏（武蔵野美術大学学生）

◎言葉の使い方について。

例えば「話者」という言い方について。「話者」という言い方は、人をサンプルとして分類しているようです。話をしていただく方への敬意が感じられない気がします。「話者」という言い方以外に、新しい言い方をつくれませんか。「昔の民俗学」と「現在の民俗学」で意識、発想が変わっているのであれば、言葉も変わるのではないのでしょうか？

（文責：菅豊、塚原伸治）